

盟主であったとされる磐井に加担したとされており、これら豪族の勢力に対する抑圧と交通路の分断、更には折からの朝鮮半島情勢の緊迫化に対処するための軍事的基地の確保も考慮してのことであろう。

## 第二節 古代山城の築造

九州北部や中国・近畿地方の瀬戸内海沿岸の丘陵部には、石塁や土塁を伴う古代の遺跡が点在している。これらの遺跡は神籠石（かごいし）と呼ばれ、築造時期や性格などについて明治以降盛んに議論されてきたが、近年になって朝鮮式山城との比較研究を通して、この種の遺跡が古代の山城であることが判明してきた。現在ではこれらは神籠石系山城・朝鮮式山城・奈良時代山城に区分されている（第2図）。

### 西日本の古代山城

現在確認されている神籠石や文献に残る西日本の古代の山城は二〇か所を超えて



第2図 西日本の古代山城分布図

いる。そのうちの幾つかは、天智二年（六六三）の白村江海戦での敗退を受けて、侵略に対する対外的な危機感から七世紀後半代に急速に造営されたものである。この防衛体制の整備の様子は、『日本書紀』・『続日本紀』などに次のような記録が残っている。

天智三年（六六四） 对馬嶋、老岐嶋、筑紫国等に 防と烽とを置く。また筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城といふ。

天智四年（六六五） 達率答休春初を遣して城を長門国に築かしむ。達率憶禮福留、達率四比福夫を筑紫国に遣して大野及び椽、二一城を築かしむ。

天智六年（六六七） 倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、对馬国の金田城を築く。

天武八年（六八〇） 初めて関を竜田山、大坂山におく。よつて難波に羅城を築く。

養老三年（七一九） 備後 国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む。

これらの記事から、大野城・基肄城などの幾つかの山城は、朝鮮半島の百済から渡来した官人層の指導のもとに築城されることが分かる。また、大宰府を西海道要塞とし、瀬戸内海沿岸の各要所に城を配置するなど、国家的事業として構想が練られたものと考えられる。しかし、七世紀末には朝鮮半島の政情が安定し緊張が緩和されるとともに、八世紀代に入ると多くの山城が機能を停止し、廃止されることとなった。

現在各遺跡で発掘が進められているが、太宰府市大野城は最も調査・研究が進展している山城である。遺跡は大宰府政庁北部の標高約四一〇メートルの四王寺山に立地する。城は尾根に沿って土塁を、谷部では石塁を、総延長約六・五キロメートルにわたってめぐらしている。城門は南部に三か所、北部に一か所発見されており、城

内には礎石群が七か所に分布している。礎石群は七〇棟分以上に達する総柱建物の倉庫群である。この大野城は水城・基肆城と連携して、大宰府の防衛に備えた山城である。

### 神籠石の性格

神籠石は、山頂を取り囲むようにして山腹にめぐらされた石列

で、その内側は神聖な靈域とされたことにその名の由来がある。しかし、一九六〇年代以降、前原市雷山・山門郡瀬高町女山・朝倉郡杷木町杷木・佐賀市帯隈山・佐賀県武雄市おつほ山・山口県大和町石城山などの神籠石が発掘調査され、遺跡の性格が山城であることが判明してきた。つまり、平野や河谷に面した眺望のよい山頂を内部に持ち、山腹の石塁上には版築の土塁を築き、谷筋に城門と水門を設けるなど、神籠石はその立地や構造の面で、大野城に代表される朝鮮式山城との類似性が高い遺跡であることが実証されるようになった。



第3図 御所ヶ谷神籠石地形測量図 (行橋市教育委員会提供)

## 第2章 古代郷土の夜明け

### 御所ヶ谷神籠石

御所ヶ谷神籠石は、標高約二四七メートルの御所ヶ岳（ホトキ山）を中心に広がる遺跡である。現在遺跡は、行橋市・勝山町・犀川町の一市二町にまたがる。遺跡の存在は明治以前から知られ、明治四十一年に伊東尾四郎によって紹介されて以来、分布調査が行われた（第3図参照）。

分布調査によって、遺跡は約二・九キロメートルの石塁または土塁を持ち、雄大な石垣を築く中門には通水用の石樋（水門、第4図）が併設され、この中門を挟んで東西に各二つずつと、南部の山稜に二つの合計七か所の門が設置されていることが知られた。また、中門の南西約一〇〇メートルには建物の礎石も残っている。当遺跡の調査は一九九三年（平成五年）から実施され、土塁のトレンチによる発掘や中門石塁の測量が継続して実施されている。土塁は版築によって築かれ、幅七メートル・高さ五メートルに達し、基底部には花崗岩の方形の切石が整然と並べられていた。中門南西の礎石建物は、梁間三間（約五・一メートル）・桁行四間（約八・一メートル）の総柱建物で、建築時期は不明であるが高床倉庫の可能性がある。当遺跡はこの土塁で囲まれた範囲が約三五万平方メートルに及び、古代の山城のなかでも比較的大規模な遺跡である。

七世紀後半における御所ヶ谷神籠石の立地環境を概観すると、北部の沖積地には京都郡の条里が施行され、条里南部の里界線



第4図 御所ヶ谷神籠石水門（行橋市教育委員会提供）



上には、東西方向に西海道の田河道が通っていた。この時期にはまだ豊前国府の政庁は造営されていなかった可能性が高いが、国府の前身となる大規模集落が東方約五キロメートルの位置にある。国府との密接な立地環境は、筑後国府と高良山、肥前国府と帯隈山、備中国府と鬼ノ城、讃岐国府と城山など数キロメートル以内で近接する例が多いことが知られている。御所ヶ谷神籠石の場合も、大宰府方面から豊前国の中心部に至る要地に立地し、人馬の移動を確認しやすい高所に営まれている。

### 第三節 仏教の伝播と初期寺院

#### 一 豊津の初期寺院

##### (一) 上坂廃寺建立の背景

**仏教の伝来** 日本に仏教が伝えられたのは宣化三年(五三八)のこととされているが、これは朝鮮半島のと広がり 百済国の聖明王から欽明天皇に対して釈迦像・幡・經典などが贈られたことを指している。

神祇信仰のあつた日本では、その後、仏教の受容の可否をめぐる朝野の有力豪族の間で争いが繰り広げられている。すなわちそれを受け入れようとする奉仏派の蘇我氏と神祇信仰を重視し他国神をあくまで受け入れまいとする反仏派の物部氏・中臣氏との対立である。